

7月7日施策専門委員会

コメント

五味高志

(1) 森林のモニタリング調査

全体として、まとまりが良いと思います。上流の森林域を単位としながら、「斜面」と「溪流」の流れがわかりやすい構成かと思います。また、これに加えて、平成元年東日本台風の影響についての述べており、モニタリングの重要性が伝わったかと思います。さらに、生態系全体への波及効果について、鳥類や昆虫、林床植生の多様性、さらには土壌へ波及効果を示す点は大変重要かと思います。その点では、当初の施策の背景から→課題→対策実績→適応的管理による着眼点の多様化や方向性検討→成果という一連のストーリーを重視されているかと思います。

さらにこれらのストーリーを充実させる案としては、斜面から溪流、上流から下流への水移動や土砂において、それぞれの要素（林床植生や土壌）がどのように関連しているのかわかりやすい説明があると、県民への説明でもわかりやすくなりように思いました。

(2) 河川のモニタリング調査

河川のモニタリング事業が順調に進んでいることは理解できました。単年度の成果のみならず、事業全体の背景からその実績や到達点についての説明があると良いと思います。とくに、県民調査の積極的な推進や環境 DNA の活用は、昨今の「市民科学：シチズンサイエンス」の流れとも合致しています。このような取り組みを実施する流れも重要かと思います。とくに、このような県民参加型の調査を積極的に進めるに至る経緯などは、この事業の大きな柱であり、「順応的管理」を考えた際には、河川をより広域に評価し、さらには、それらを県民の理解や還元を進めることとの位置付けとしても重要かと思います。最終評価報告を意識した年次報告書の作成が期待されます。

(3) 最終報告書暫定版について

今回の最終報告書暫定版は、「モニタリングの最終報告書暫定版」のように見えます。施策大綱で示してきたように、本事業は、実行5ヶ年計画→事業実施→モニタリング→点検・評価のPDCAサイクルを4回実施したことになります。この点を踏まえていると、モニタリングはこのサイクルの1部であり、それが、この報告書の多くを占めている点はバランスが良くないと思います。「事業実施」について、より多くの情報が必要かと思いますし、その部分にもっとも大きな事業規模かと思います。これは、私自身が、以前からも主張している点ですが、大綱期間中にどれくらい森林の整備が進み、その結果どのような森林ができてきたのかをしっかりと示す必要があります。このような情報を管理されている部署は、水源環

境保全課や森林再生課などかと思しますので、その点を事業サイドからの成果の提示が必要かと思えます。

その際に、どのような点が森林管理としてうまく進められたのか、もしくはうまくいかなかった点はどこかなどを明確にすべきかと思えます。とくに、順応的管理のための評価や大綱後を見据えて、見直しすべきところなどが森林整備側からの資料として必要ですし、その分析が必須かと思えます。その点は、水源環境保全課や森林再生課などからの情報整理いただければと思えます。

また、上記と関連すると、「シカ対策」が全面に出てきている印象を受けます。シカ対策はあくまでも「森林整備」を適切に実施するために必要となるサイド的な位置付けであったかと思えます。もちろん、シカ対策は重要ですが、シカ対策が重心となると、森林整備や目指す森林の姿（林相）、それに向けた整備の方向性が見えにくくなります。事業バランスと説明の仕方かとおもいます。

以上よろしく申し上げます。